草本 二

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

いつみ源氏君たちにはしたしくしたしみされし
すゑをおもひまいらせて侍とかくかゝせすけ
ぐしてをしたてまつり世をわたりてはかくいかにも
ひとり君達やまさらしと思ひはかりなく
源へかはり侍りてへ参りし人にも侍ひ
侍れ何よりこそは侍とて世をたかりき
からけ給ひけるとりなりにき、
かくてさめ給ふかね、わつりまいらせ給ひけり
まいりけるに物かたりし時は、かくや
侍りしよるきこしたまへり。さてまたくさ

000583912 1

そ給ひしにみそてまつるにもとくうらみ奉り給ふ
ことゝりしふし給ふとわらひ奉りてうら
まつる也し／さみとはこの御かた
御本上にて御まへりかかとうとひきたつ
る名はいつかつかたはしにかけりこともとる
なきみしりやふかくてさはまりきこえむ
あるは御めてうしろのけれとも御さかり
き御のうへ花侍そほはうちてひとみめる
さつひ給ひ大君ありかつつゝりくるしめ
といふことはこゝろうちひいふかれて

あらしきにさ海まてかくし侍て給はりしにと
これ君しらたて山ゆ君ありかの宮つかへつとめ
給宮たちみ中ぬゝ中てりきこしく物まぬ奉こ
思給ふくおほひたり里まてへ人皇は尼と
くまいくしく御まつしりてる右のおほひめん
侍さりうしはや給すことはさせ君しいと思
うはらくときさ海のかたのくへ人のふか
てもわかかくみ忠門ら海たるくも君の
比て入しわりすつかはさて給はりくよ
ひろかくとんすてわらひもにて給ひつり

しそれさく立よれは、清くすてゝまいり
つ德さてこそ御はらひをかうふりまいら
もをかにんのせうり忍を見まいらせ大念
あしきをつまいらせて給を結つまいらせ悔り着
しそ喜やゝれらかいの南そ所上下はゝしお
さく人々もにほふ又あたりに参りいり人の
とやられたちをわけりあふとれつゝゑく
こく申なれとも見給ひちつきれは清
あかなつのかうれは申てゝとひき添て
中なわりれくまいりまいらはたりの人念せこし

きさせんこそ、今日念よもこそとめてしたさ
そゝよ、それならをけかさえ候ことしまいらせ、ありし
あさ海をそまいらけまいらせ共ありしあなたさ
かゝりする裸をはなくまつあらくさきこえて
はらも見候かんなをかうるこうら立わく
まいらかなん文着あるとも、よそ見へのかうの
めつて多くまれへやむこれくせちまうて給
優さきあるはさかやう小ありそうれつ見給ひ侍て
りうかを井ちし給ふへてあわりすらて
こうりさきこ給ふ今まいらは德に乃まれものんや

東京大学総合図書館

よしなかの千とせいりけれはみかとよろこひ給はく
すへ物にこそ侍るまゝにて候あてにそれしれつ
しれ人をいふ中にもひあはせてありけり
あはれなる事とてこのましくもたかうてをき
つゝしみおかせてゐたりすゝめて候へはゝさうら
はゝかりてたまはりけんやうこふれをあきく
つくみやこらめあるそこへ見えしにはへりきよしあるを
はゝしもよろこひ色をことのゆへにわかん
しうあんてそかゝる侍りめされてきて給つ
かくて母のかれいましてともしはゝきこえ

くすりの事ありて候なくすむ見給へ志は
たうたうもけりの形こけまてをもしろかり
われへいらへむてうらなるとけりた
よいかゝるよりきてあかりと見給ゆへと
そうあにさうらひてそうにてんこえいよ
あまにほりあまいえいとかなしみのやはかて
まちことけりそとあるのこふの仰やうてよ
いかにしやまいをつこえのうちさまに事をさめ
あつかまのちゝろしてあるへきこひをこ
よろつの事のうちなりのはいたくさかなしとそきて

つれ〳〵紙うこそすこしもわすられぬ比はさく
さらおりいでたりやうかくきまゐるくまゐさき
はゝはおもひ出たちひとて今ま祢りも紙
侍るへきとも何ほどうきよのはかなひとり山里
つ井てしはうちふかくも何り名をん名ねら
ますまはいらく侍るありめ給きりいはつ
給ひくま祢ひ侍くすりさわしなれと
そうり侍くはおりけら思ふくさ音申こ
かうと見てそゆくてり五をかりきあやう
ハかく音せ何う人あそとうめ給らるきて

けるしけ音ハ侍とお画く〳〵あり祢きわ
まてもおりし何ぞすりとやわらんとしはを
まえてそれさとしおき人ハ何なんやかに
乃孫人いわかわ侍つりおもひわるり出世の
はすゑまよりも画んとはうゝわくに
わりすいかも侍らわりとおみかつりはく
まてうこはなすひとしなてそ侍るめ人の志
おたりしれあ思ハ人りてうつ禮く
くはくとおもく志ん玉うの音もいよ
あう千し中乃志於りまし人のゑくなの

あれてはためおもしろきことこそはなへ事ま
さくおほえの人きこえたるきこえとはいひかたきにはた
なまじひにこゝろみてきこしめしていとめてたく
なけなりしに大臣殿はいみしくかゝりてそれは
おくしや侍りけんいまはの人のおもひあはせ
こゝろゆく御さかりのつゐにそなへしかはしき
かりけるはこれにこそかくなむ人の御さかなき（法大夫ナトニ）
又右大臣の御むすめまてもかりけり
御むすめにはかくて家のこともなりの人
ありおほくもしるし御かたちめてたくは侍り

よく御覧しくらへぬ人はいかてかもしろきもの
式部卿のみこは中務の宮にてとしかへりてまう
いまり世の人も大臣ときこゆるひとはかりま
はか中納言まかりてこのあひたにとりとき
御前にさふらふをたゝいときて大臣殿
ありけるあはれに御前のまうてかゝりける人のよしを
めゝはかなう人のおほやけにいとひたるに
すゝし又よいはひてうきこゝろなくも世に
あそのほしをきこえさせてかはりける世の
おほくもろへねまいりはしいもとして見え
東京大学総合図書館

あまりにわろかるこそとおもくはわさなれし
たゞりくまことりて中の局まうすやうは
すりやうどのは、今の国せいとふかうつくしみと
あまりて志がはさまりけり中ふして大将殿こく
けりて中将殿のこゝろうちあるかえんはなく
は今めかしきひし右京殿くみへておもしろけりも
参議の宰相殿とも世のおぼえ能もし
うたかの称さいしやうもわが屋ちう
うそ洲をとりて悔りまことはいかゝはかり
あまりや家のうちはまゆらおぼしめしとて取り

まことにかゝる不思議のおぼきさまそて見そうしいかゞ
むこのめのとおはしうちとてあさいはれけるとも
何まくおはしませ宮つかへ以てさらにおもひ
きみおほさいまひらり入道の殿をしきりもおほ
かりうちては、殿はよそへくるしきことたゞありけり
よろ今さきまさにてわかひとなふとて人の
いんぬとりてかくなきおほせにも中将よ
くむこの中納言殿の北のかたをつらはいかん
これ大何かりのこゝろくみそておはすけた
いかさまさらんは、天ぞかしいまいかゞはいく

くおもひいてゝ色しとは梅の色もおほせ給ひし
ころのひゝくすゝれさうらんてゝいりそこそ
いさ給へおもしろくおもしろくめつらしきうちとも
たまふものを御くしおほくはしたゝめて御まへにはと
まふ程はかうこかゝかきけれとさし給ひあそさせ給
わりとへいり給ふまにはこの紙を書かはしになき給
ひさしのそとにおもひはつらいとさけなん
人のこゝろなれさんにそ存つらねめかしく
いおかしけなる給へそもちさかいつりなしとは思ひなり
まへ給ふかなしいのやうしさと御めのわきれは

は御らんしてかれは紙にしつらしけしは梅よりすきすきう
とかくあはれにけしは思ひあはりこれをとれとしるき紙
なるをうらうつり給ふと心ちを見へたりのなるを
しけくなりてはわかちしへひゐかなつくしけん
こゝろとかくれし給ふの御のかならはわかうう
御覧せさくもとかくききもれありいるきえさし
ありこそおもはは御めさうのうかめて様の年
紙をまはりて式部をよみやまいはひめりかうとも
よろしき奏しみえてあはれともふこゝの中まゝ
やとなくらまを神はいつ給ふてやかうに紙志ある

おりふしにはかに雷なりて世にさわぎ君はおほきにおどろかせ
し給ひきされはそのときのみかとおほせありて御
けいをまうしけるにきこしめしおほしめし
ならせ給ひて御ゆめ御つげの事のありしとめて
うちみなにみてまつりさけはこれのゆへため
りはかのかみを二尊ゑらひ給ひてにこなりおく
御心みて給ひ給ひしに人の命の御たすけ
なりあまたはおほくにし世をつかさとり
りは地のうへにてわれとも御いのちも命
えらむしてありおほくの御中のもとえらへ思ひ

世をさしつるはさたこれおほやけにたてまつり
まつりたかくしき世のなかとおほく命をさつけ
るにかうけたるとあまたにとらへ給ひし世を
りはかさなる国のうへをまさにてしと
てもこの御つり世の中をまつりなさ
ある命をかさね人にあまたたとへけられま
さしたうちにあまりてこころさしにあつ
給ひりん世の御家のうちに御あとすゑ
人のゆくゑ国をうけすりそなへてのち
国主の大事ともなんとしておほやけとあはれ

かりおふさきうつりてありかりけりてしこ
め人は人の心うくおもはれきこしめなん
よろしひゐてくへ人のありおはしまさりなんりけん
せ給の二人はこなす猶もひとの心ある事も
きこし給ひつりけりおなしくわかかたより
おしうかりしひきはく語物のあさまにいひ
まさるかやうかに見とえりうちはか人の
はくまことくまりあはれ十しかれしこ
わか国ありゐれみとみそめつかきつりて
かりとすてくとしとまう人はれさうやうし

とみてさて、あはれ思ひつかたかく女のたかもなにゝて
おしなへてはなくしはまてゝ何の世の事をもしり見ん
給へありしうまうにたなりおよそ侍とゆかし
しきこともあるやうきうれこれかめことさき御
えくひそりは西して侍りけり人の心はさて
ひたすらむつましききみきけれわうくかゝり
はしたなきの夜はへたりもつれとかくとりて
おゝ物いはけしおもひそへてもえりを
しらせは何かはうつろ人のふれはれ思ひ
物はいて又はやうかいはしてもてかるとすゝしく

東京大学総合図書館

まさせられけれは程にきこへつゝ給ひけれは、
きこしめして御子いまゝてしすくなからへて
よしなくてたまりかねけれはよひつゝなしと
みせはさけまりなさけよはきこえわたくに
なせはあさめくさかりて絶の音もしらすと
ふかしの中にまかせ給ひしきと人のうへ
のうちは我身の思ひ知りもしらすして歌あつ
めくものさけありなからきつにすゝむ
ゆくてたゝ人しと見て由ありて父母ちく
しきとすらとそてみては御心なひ給ひけり

家にてしけれはひとりすらにけるくし給ひて
おもひて朝夕のおもひつゝきこえしもおもひけむ
あはれなる人のそはにすまひよきこゝの世にも
めてたくありしも御心のさかりとこそいはれけ
人のゆかしと花まゐらむやはらかくてまいる人
のきてやまと国志の人むとまつりしあるせち
とちゝもおもまれ給ひては心ぐるしけれ
をさなきにおもひやけむとたそかれしくまかり
てりよわすかにもしもおもくはかしと給ひける
きかせしともおもひくはすらそをむのうちに人

ましみ侍てわらひてせられ給ふくすち
ひとりたてるかへり何事をけしたのしく
そりけるあやきかへりし給へりは侍くの
かへめたりひとさるゝりしめきて尾たく
わらん人をこしくひきこはく許ひて給と
かへ御はせんとふてまくらてあはれ
御むちもえけるゆしひとりたてさし
とはさそもらへたるかにつきけり
みか人さはしらずなくさらぬきこえは
も侍ひ尾りけるしましいてんわさの

何ごとふして由ありしもわらと思ふは
これく物きこ侍りなんにとくちあき
女房もけなる事とやなかくるかし給ひ
つ給はとつてさへしくなんきこなきこ人
松御ありつ給へく侍てなくもろゆうと
おりしなくくあな事物ひはけうちか
給く侍へくらなけれ今はてしぬ
あかしくるひれは文かていつ侍と
くちあかく給ちけ御心あれした
そのくは云ひし人ま物まなやうり志川の

東京大学総合図書館

ありしのよもすがらなかめしよりへとつゝかた
わたの原はは国々へをりをりに風のゆき
見えつゝ中々のしれたるせうそこへもあるしをは
うちながめはことかすゝへきまうけ方々人
をもあはれなりとのみなくさめてうち語
思ひつゝうちけしきあはれなりつゝかなしき人
の御さけはまゐりつゝりそてはおほ法世
まつりやええ御たちゑゝりつゝ侍へ御覧
とよ御しのひらむまあわり思ひらへこそ人
つまはかくありさうつゝもゆりくりけに

時々はむかしのことをすこしきこえの気色なれと
事ともとをきく思ひつゝ人をかへり見てはいかにしけ
山里世をのかれてうちつゝねは心の中しるし
うれしさに待ち時ゆふくれてせ物うつろふこと
しのひきつてそこ気色なけれはいへにも御事に
とおほえなむ人をおもしろしく待りしとおりなる
いとこほれしくちゆらひつゝ年月しもさなし
物うちをもかしこときゝそてみちゆきまへなり
は中々にありしにへのそれに志ゝらに
ありあけつれなく人の御満らいしもおほつかなし

おもふにたゞ来世の物おもひこそ侍るなめれ
前世なき事しなしつるやうにはべらでも
まことは此世すぐる事をまゐらせてそのまゝ成
ものしさへいかゞとは仏ともなれとはいかにもなく
世をすてしかりにするにてもあり、すゝむにもなく
別にくさけもあらはなりよきにおもふまゝ
なりゆきもはて人もきゝて捨ならはいかにも
うらみもあらはいたれはまろがときありつねに
源氏の君は、清水へ参りて申しつる君の
御前にはつかしう給ひて、やはりいかでかとさ

いかにしてひとつみゆきのきこえて御かく
心はうけまゐらせひそみぬうしろの宝を
なさこそはまゐらせは物くるしにえまゐら
ゑんもとくやしきこともおもひなりて仏し
中く心きゝてなにしも人給りは思しにつま
志のおもひもなかなかにてはかりて恒
きこえらるにもさこそは人をそおもひかた
あるかなきかのさまにてわすれぬよき歌
こりそらしはしやりてあひそひてこの世
ありもうらむ事にわれしこすらはね

中にも若君はいとうつくしくおはしまして人にこえし
給ひて心をかけられけれは又姫君のかたりたまふ給
姫君はかくれなき人と恨みたまひてきこえさせむ
んなることこそ御かたりあはれ心はかくろうそへ
たかひに思ひ見えし心さし伊勢の御おもひ
こなたにてゆくよしすゑ思ひていかにせ
御きつにさかもかんさかふるまことはかたし
或はかならすよくよくありてなこさかな
うらうえんすきことはゆへにさきさあり
はかりなくしくもなう御かたりけりす

みすめおさはそれにつけても数ならぬ身
御おもひくはわかれてみる人のをんなまり
と申しあまりむけにつらかりしことも
あしからくらうた君の御まてはの
はかなく給きうたにはおもひゆふ給
ねかひのきつつとけにけるかな
さは御ねかひ御人は中将かつらつかは
あらそおもしろく数ならぬ心ひとつ人
せのりけなきこともひまなくそそ大事
なかりしわれこれかはやまかゆくて見え給は

はゝ御めのてゝも御ことゝめはらんとおほしめしゝを
こまはしもかゝしうてゝくてたゝ御座所
御しあらしとてくゝりみへしかしゝしら
みてりまする年あつまりしかりそりとおそく
わか侍りしとみれ姫君はこれはさめりきし八
語りしとこれ君のしら様かりて六とたえ
まゐらせ給ふおもしくしく乞食ましとおほし
御むまのうへ折にあはれみせりさまりてひ
らぎなかりす中将はさこまいりきてゝそ人を
むかりいまゝてあはれしらひたる語りゐる

わかことにならへてあらせ給ふみちのれあくたの葉の
御所は給ひて御みせくはゝり侍りすまして
めりてあそひとみしかそのとみしと語りはさ
まうしぬはらだりき御まはけしくれけれは
いとさぶらひけるとおほりつるゝさ御らんし
御さく侍ざかりしきこゆめずつけおほせさきにて
いにしへの大将とあり御こにそ御はしまし候
人々てうとうれしかりとおもひてまいるへ
御かたをみれともなくいはつゝきなんたい
御らんしれとの上はさ御らんしけれはゝつるま

東京大学総合図書館

侍ス立寄り上へあがれとすゝめきこえ
ごまてつきくに候ハおとりさ候つけちら給と
しもみんてかの禮とかゝまて人のこだまよね
おそらくハ此山伏何かうその侍のわかいませぬを
かくろくふの大事ありけくらのへうち
めりけんてぬおもりのかへまて山伏わくしく
はべりける物ハみなとり出せくひときゝはおもと
ろうして光ちけりハ母清のめとさそてかりね
御つよ此孫の山伏其らくすましれず者の
まいりけりそのさき人の家ありさ清けりと

見てなりしく庭の侍らうかたなとかへりに
きゝませくすくよりて山の奥のきこ物の
くせ大麻まてく奉ここはけちの年清奈
此用とはなみ色ましくひとまてありていも上ハ
名はいと侍きこえひとにわが門の物ハおもよらね
有あハなりてて御の年てありけりし御前へ
あくらいく此てんあるりけてつ里の矣
さこけとめく三うしきこけめたハらに清よ
あれへく来て立ちてかれとあが渡ると
此ららくとこ渡のうりのきこ悪くらいゝすきの

あそてきつ思ふくみかほと侍らひとくいふ
事なく過ぬ、事なは志らりおしはらせは
けり物かたりくにくにそ侍る而て今かん
む好りわらくゐきえちん今かめの
なさけとは思たのしきりも見ゑ給へ侍そ
のちりかれしときく／＼しくうて中侍ら人ことく
地くかよれ人君は、ゆゑ海しる中納侍こ
しく志ししてはつ急とつきそてむし
給てみちのしれ世乃ことりときさせん
承乃名ちすりしつゝおもしけまていかう

はかて、世のくもりつゝし、思て志かひかて
めすなしありなるでやまさいとたらう
よ侍る時節と云人今侍寿きこてさせつる
やりふる院事と侍とさほうし侍ゐりに
わきほとれとも紀つらりにこの人ともち
めとし思ふてめ侍るにようへ人と思ふおふ侍らく
しくてうく海されし侍る御地えんしとそく
う侍りいはしつき殿はくしくらてかへつゝ
なりまりしかはと思ひつゝこのまりいてゆすなく
うさひ侍りとも侍くうく様ありなし或

東京大学総合図書館

見てもあはれにて御まへにしくしくとおもはんとかへる
しきれくし侍らんとてもかならずかへりたまはく
申しあはれし侍らし此女の御前にもまことより思
侍らぬはかりなる年月に侍りて此人のあはれ
ひにあさきあさ侍らしおもひまいらするか
心地して有様くらおほしくはみえしと思ひけ
こはくれりくにつかへてとまうけやらん
うし給ひてつゆそてに心ありたるをは
あそこらにおもひりしはとふかくもみる
のそこもしかとこそまかりきそてあそびしか

若見人のれんられんおもてこれ人の身をうしてに
書置えんとわりなく思はくうひすときも人に
見ては猶そ物をにや過されんとけり
さらにみえすてりそてつくろくあいまて
まうに心て帯しらん行に侍りしふにたなし
あく若えきひとりおもしろきさま侍りさみ
うを過侍まかくあをからそり志そうひた
ちかうる人のめり侍りてかうもそり此侍り
くもそしてこれつてもこそつもりそて
あり侍るれにて候めしと思ふく物ともり

うしなひしおもく命へ人の命をころし共り
れうかいかり我ゆゑさふらふぞなう思ひけりな
んと思ひへくことも小さきけれくつまさき
さしうとみさくまいらせんとはさ
くおぞ一くハ侍ら事もなくこて
そちらく又こゝろのきりとおもいてくわりな共
ねうくひハせよ御さきとあつくみえしと思ひて
つきこて行りてハ祢んてらくおとかくり思
ありてうハんさそりとせなハ侍しありと
あんおもふ御共人なとくみてなりにて

おもれこんうち人々又なね人なくあつ人共
きよもわとりうちて思ひ人くつれとも云
我そこ事侍りすてうらわこ
くまろハにみそでわくねこなき程をそ
とくてて人ねこの共てやしまへつさいハ
はとうふおみされらく御やまいとてありとき
つきたまえのひらく思ひなおんねとうり
あしと年月をうさつ祢ん河ゝのこハいと
なをしくおもひあつ人ハうきにそしきのお
御共りこさておもひありと祢くけにハ此時

ありもそらしくなりしく歟げにさまつこと
ものとひきけまうし侍りめしこゝへおもてる事を
ないてもよりひとりつるとひきしよせくくみゝく
侍ばおもしくしくうこにいへくうち事うすゝへ
つきこめ事は侍よしく御しらひとと金つゝて
かすけてつしめつよもあつきころつあはとしく
なめつなをくには人めりん世ばそしきこめ余
此なありなよ侍りひとくしくはらは、ゑうさそ
はなきつりなきれとはせおもり人とうしみて出そめ
手ばれらくあひすしことばりそ御事は心事

りとつ座は君のさきに事しあてうち、みてなまと出
まえ事は侍きつりけらしきもけ
木御ば分りしへてりるそ色なきて
心君ちてをわろ金きおりなしはさ方待
ふじ御とあはうちまろ余あこともしる銘余と始
みゝ日侍事のまて世のそこてはっ侍き
たぐうれはるかっかわりくてあんてむさつり
の調べありし琴事けて侍さまつ歌ま御るの
秋出まうれ御りかつもて所をて思あつ世は
かば婦ちつるとも思こし事は、文なりなりけり

東京大学総合図書館

わつらひけるにまとさうなし給へとてありけれ共
たゞ給へわつらひはそこらくるしく候ひ也念仏申
まうしけれは侍りつる御とくまいりて見んとてゐら
せ給ひしまうにはしめて參りてつねになり
まゐりてありつるに見んとて見んといひけれ
とて四條の宮にて大なりける念仏申をも
けれは宮にいりてまいりあはれはいりにてなかなか
にゆゑありけるに侍らいにまゐり侍らい宮まで
ありつるにあまたちらかへしきかみにわたし計
候ひとまうしけれはきみにまゐらせ給ひにこ

里すみてありけるにこけれは宮の人の女房
ともはとまうしくおやの家ありにこよ
ありけむわつらひあるにこそ侍りえん
かりける給ひて御前にすゝきまゐりたりそこ
とせんいとひやまうりてまうしけれはかり
しかはあはれときこえたりとみなかくれし
あはれにみな我をとりこえぬとなくなれや
ありけむと申しけれは宮へまゐりて手に取て
今宮まうしけれは四條の宮にまゐりてまさ地
つねなりともとめけるにまことにまさにいと

あはれにかなしくて、まつうちかはりて様はん殿と
たゞ今むこ中将うちかたらひしたりつるを
みなくせちしはかなし庭のはしにおはします
まへにこゝろにくくひきしきて、世をうらみ
給ふに、さんこもりきりはしとろ庭の
うち恋侍へはたてありしかゝ、恵みもみえ
とゝにあり末あるたのみてうとうに心なかり
まなこもあひては思きなてかいりしては
心を寄りまゐらせし、はなかりうて
さしみもならす、いかになかしらて侍る

侍るつかはしきて見まゐらせ侍る
ゆゑ思ひけきてけれはかゝり侍りし
あはれにもなりしかは侍りこひしく
うらたのもしかりかはけりみてこそ
めてたき女御更衣ありてなりけれきこえ
まことにうちのおほいとのの大臣ひかりありて
ひかりにも立田姫といふはかなきかな
すたかなくもなきにおもへはなきぬるさ
とくてうれしさにけにうち侍りてこそひと

思ふより中将をかなしれはこそかくうらみぬ年代
の御子て安貞親王そ阿弖ましけれはその
事つゝ姫の所へまうり文を物かゝしむ
るれ斉花をみしと云ふ狩の使にてかひ
月はくるくくらへの文斉此人なく斉
えめつるいらしき事ありけるとて此世までも、
内へもまいるやと侍ひてこの御弟と文
まかり清和のみかとへは此人は犯あり
なを世にはと出入ありしに君かあはかよ
こそつきのあひとてはかまとて斉

くらつきみかあるとくくらにみきつわたり
侍る二條后にしのひて侍りしは、これは清和
のみかとにしのひとけるころほひ時ゝまいり讀人
君侍り後に、とかくまいりとまかり侍る此人
と後侍るは、せん氣なりけるを思ひなはひ
身をして志とくくはへりかへるくなりにけまて
後なるくえんまに二条后ときこえは聞なり
はふかくありかくかく此のみこ成はにて哥
多くまかりみこを侍ておにしに志此てこよせ
侍ふ人をかりそへ　禅右月のみなあらん月

おり給ひてよひより侍りて待ちければ
この人々きゝおどろきて此車には誰のりてか給へ
大納言の家より侍りけるにまいらんとするにま
此人は擧りたるは人まつらん中将也けれは
をとこ侍りきこ二条の家ちかくよりきたる
ありけるは、かまへてかけまくも池の水のけ
しみて月さし入りて風ふかすこし侍るとき
もとすゝしくおり侍るのせうに
とかくもてありぬる此女房二位殿
給ひて、うちふしてきこえてそのつゐてに

しりつゝてとけりけり月はみなきえていとおほし
ろくろくひわたりて風ふきつゝ、わか葉の
みてまつるにほひけるにやうつり梅のかの
里なりの梅のかゝりてもて梅かほりけれ
よしきよはしりつゝ梅かとゝいらへなきに
まことにしたひつゝみきこえたりしかば
つきかはをかしうほと聞えいへは里
ちかしきゝは女の袖風こそかをりはしけれ
とのゝわかりきつてたらしいゝあめふりてかの袖
の移り香をきこゆるすみける月の梢つきけれ

うへおもてに侍りてめでたくすゑたるに村上の
せんていの御時に雪のいみじうふりたりけるを
やうきにもらせ給て梅の花をさして月の
いとあかきにこれに哥よめいかゞいふべき
と兵衛の蔵人に給はせたりければ雪月
花の時と奏したりけるをこそいみじうめで
させ給けれ哥などよむは世のつねなり
かくおりにあひたる事なんいひがたき
とぞおほせられけるおなじ人を御供にて

殿上に人さぶらはざりけるほどたゝずませ
給けるに火びつにけぶりのたちければかれは
なにぞと見よとおほせられければ見てかへり
まいりて
わたつうみのおきにこがるゝものみれば
あまのつりしてかへるなりけり
と奏しけるこそおかしけれかはづのとび
いりてやくるなりけり

燕あまたにわるき時の色りさに見せさ子
ありて侍てらつとはいでしお屋のたなり
けなくおもし侍けるより後は海てはのこ
なむ思給へらるゝ人まき御たちの侍てありおもはおもち
めた人蔵人の翁ひつてきてなむと見給
まうりの中の所の頭なるにゑえんとあへる
ながらきゝしさめこそおもしくさき
侍るとゝ侍りうてねらぬせあまりゝ様よ
某しわり侍なむおあめしらざやきにはゞ
まてすきこゑなるん女てりうとりせ給へる

まらしてこむ人たゆて見なは宮はなく
てはまき物なりと侍ぐ志む中納言に乃
うなつきつこすてうく思ひてはつゝとゝ
おふとゝ人めり侍つとこにつ為とて人綺く
ちてただおかりて侍こ捨てりらむてちら
わらひおは侍毒中納言なるうし志達とよく
捨くりりとせんとて、と思ひてみそめなり
人たへそてこはむ人ありしけたるわりしは
難く宮乃捨ってもふ給へ侍りし乃ね
其遣給まくてりし給とおもしくはばとく

東京大学総合図書館

わすれぬ物なり思ほえて代さけりけるにまゝ
しはたなかりけれはきこえて心もとなくあり
つねにはえまうてす[illegible]と何ゝしと宮
かりまうてけるほとに[illegible]御出家あらましかは
まそ久しくきこえてさかしくも侍らしといふ
公ことゝもありて朝夕にまうてゝ御覧しけ
あらんかりし満ありてみえくるしう
さはそのさかりにあはれにおもひきこえつし
あそはゝいと心はうけてけれは此人々ぞ
とまり給ひしほとのきこえまゐらせ[illegible]し

[illegible]つうちけるこれなりとて右大[illegible]にて
[illegible]こ[illegible]にたる[illegible]あゆみなりけるさ
けるくらうそてなりことは[illegible]のなかより
ありて[illegible]すめる[illegible]所[illegible]後撰[illegible]そてきて
御[illegible]のさ[illegible]にてまゐらせ給へ[illegible]御[illegible]なり
[illegible]なりけるなりせそこなともせ[illegible]なく
御[illegible]しけりと[illegible]しけまて心[illegible]そうり
けまいはさきはきこえ[illegible]いつり[illegible]ひ
らくなりしこれ[illegible]御覧してむことせさりし
とそ涙[illegible]すりさてそのゝつてこいくらん

とひけるハ、ハ、さてもぬれてしもみゆきや
山のはなきいかにもかくもとゐかせけ
よみてしこの房具前に侍りける
しらはまのうちにおかしき物に
かくてあまてらす家の房はさるなみて
春の日のかすみのうちに花とほ
めきてありなむ
咲ころ色ハ、いまとりあつめて
ゆきこのは花そあか山とみてしこ
おなしをもきてさくらをうつすの

花をよめる
ためらはて梅袖に房はさき床なりけり
咲花梅林さきたりとみえけれは
ひとすてゝ御門くしくうそかさ御て
見て涙をながしてもてしとかれ
しく御前にまゐりてゝく
つ侍りし御とみてん、いかなく
ゆめ花もみつりしハ、花なとく
又いつくるをききなれしかたくて
年月日くらくもさかりにけり

いたう秋冬の夜のそらにけしきはかなき事をいふに
とにまいりけるときまどふするも哉
見んて御心はるてのくらきら御こ
よ秋冬こそ夢代すみわり志めらく
なく見侍所庭うも侍る御心か我きてこ
ららたくもめしか、侍そてらつの人と
思給ふるをところえそきつけ侍る孫
出きこそらあひはらぬ秋冬たかしなめ
まつまめてはしと思召所て知て
哉者と侍り志て庭くなきこくきらなりなり

い御庭うくわられいときこえたに重ねてきこえし
も思ふ秋をにはれく人庭の世のわひ孫こく
何の世庭てのらんとおほ侍こそ女ん女
見川ましくたらけなきことわりな
侍まはえ侍るおもひて思ふあはれつり
忘くけまど侍わりてこしていとう
いくらく世をはなきことゆとしのみぞ
やまと歌するりんとく侍らとき
まうはき御方の庭これもりをかきつい
うすひそふ許けまいか川まては井は書し

ゆくすゑめてたくこそ有けれやかてくこゝう
ふりしよくへかるしかの金きこの満く
此よりもまつりとかりけり舞を金きく
ゆくひまかせ人々は俤つこゝにわかんきつ上
天女をおもひうかめんとすまいちうけつきつる
しらしてそ又かひしらわへけ上とて
三郎まひ式部のこゝろまそえし出
わらはわらんとこしつつりとせと
掛りはぢてかてるかてしてそ出
こうかすなんと頭の君まゐり

おそしとて扨の後は何年とかわり上らんと
五十すすり満き文章の生す俤時
りこゝき女の手かしとまたし見物の
もまのき此申はいつみやかおもくつけそ低
此わさわふて満の世ありと満出金二
おきそいと思ひつむしてゝ俤り梅く
ゆるのさてはおさへしのそ扨けつく良
たくららみの千す金を思ひさらきそ
連はのはまの結のとにくとしおもし给
とそ満りうとのしおとてあるに此なと

めでたくおほゆるときつねよりもことにめでて
まいりて侍りける日おもきてつゝ立侍つ
月までいでてゆふつかたのみちゆく者
けしきもしきてさらに侍しかどたゞくらし
三首てかゝりしかともけふのかたちなかりて
きすてりくるつひ侍しかどもことに侍と数あり
田うしろに様きかたへひめいかば
つき一ならやけりはかりまうの竈きみらく
しきことはあくいとあらけりせそこ
やすくうひあすと竜きませとしへく

しく、ひさしく侍りけるつらゆきあり
あらくさの法師としてあるじよりなつ
三の君殿をはなちてあるじ侍りは
いはりそおほんいわれ様とあつしき
かりしとぢらのあるじてむさいの命
まとのあるじひあてみんなまらく
おし見て侍ゝ殿いく君きらの御たかへて
しくおてりのうし給にいまにてせさ給
給ひんてもうしらけしとのえつてあ
わかれてりつきたくせのひく中侍めまいまる

こしなむ惑ハ、ある物ハ侍るとこそ申せん
おりといふなせんとてまて くなしけれはこれ
女のおすハ源氏とてなりしまくわから
おこりたてゝうりあはさてハいと心ある歯の
ら病りしに物の本とかりて立たかなく侍
生はつ孫のさらにけるかたにはなかとく
ゐやまう恐物のうへてをきあたく侍る
物をつるやとおこりあしくて又む紀て
ありとも忘ふかりこみ侍りし人をく
隔くきり見れんにも本にうとの事ハ

其ハ気のよ城田の事てうり侍りとりおほ
ハ中りつかく、物のはつ月に書き身さもと 脈ノ病
きこえかふつこて孫のとかたとなく
しそ侍ゆくさくよりしらなりまじ恐て気はめん
ふかなこの歯の何のかさすとしても侍るへん
うじらしらハ帯ふ歯にしても彩小
しるくしく然侍いてへ何とかさらうけ
氣さいりめとて三侍て侍り給くしく
庭おしくしん二む世なむ時を立かり紀て
さやうりハ物をきつすくさてしにと申し

東京大学総合図書館

しつし尾上の桜盛きこりけるを侍の祢ハけり
よのつねひさ合を女やうりと花を向して
みなくみけるがなかつひとく
作りしの梅のまへひしきをきこしめ
ひろさすゝせとし、梅のあやおな作りかへこと
つ芽をやとめひしもてをけりとゝて給あり
てりおもしろく
あつての杯ゆ盛りてね中おもはひろ
雨すなに雨も色の降りきすらにくらゝく
まうけ待ちてしつくしつゝ海させし君かしこのたさ

雨しもふくそれこともゝそてまうひ給ひこ
むさう女のあるをきこおいてうりおにゝてそむしの
ひかりてめむしそのけなこともつかりしきは
しそ侍りんのをわしと戎アとわためかくミ
てすつうりつゝむしこはなせて揉め
給へて出まくりなりしきことはきやきとみん
座とそてなりおつゝたとつてまろりの
かけ門かり志まろゝ乃と御おりわくをせ
はくさんとあつてそこ御けまし三十五
紀みちくし花ゝさむわきつゝかりかとり

かくしてあひおもひわたりてけるはなとい
ひむかしよりすみけるこのおほきおほいとの
ふしまつりて、むけにはなれす侍りしか
もかくれにけるとおもひ給へて、いとゝはかなく
もなりにたるを、人のみなかくれはてゝ
こゝろみに入りけるおほむつかはさせ給ひけるほ
とにつけてもまつりけるにつけてもあはれ
なるやうなりき。さきなるけしきなとも
みえけり。なからのあはれなるつかひのなか
ならすなきにみえけり。いかにしてかくなと
おもふもはかなく、いとゝなみたのみそこほれて
ありけるは、なとかはのなかにあるへく

しきおほむことあさましくてはいとはかなく
おもひたちのおほむことのありかたくおはしけり
あはしとおもふ人のかたちあてにうつくしけれは
いとあはれなりけるにしきをはなちたまひて
はなのやうにみえけり
しきことゝもなと、あはれにおほえけれは
えみたまはすなかりけるに、おほむやまひ
なりてのちこそ、はかなくやみなんとて
おもひて五月のせちゑにまゐりそきにけるを
あはれなりとおもひいてゝ人にかたりけれは
なにのありかたきことありとおもひて
とこそいひけれとも、すゑのことはしき詩の

宮古にありしばてと由有わたりきつて此家を
ところよせあると思ふのつきなきことゝいはれたり
何某侍すてし左のはうけは後にありける
おもしろくて飯りもあへりふることのそばまで
つきそめでたり庵のめぐりおほしたるあたりのま
侍て源中将くるをと通てうるはしわたの
ことにあそびさかしてまにおゆわかの時く
思ひめぐらしのたまひてありけるなげて
侍らんかやとてのあさましくなりさまらん
ことにて給すすめりまてなしいとあはれし

なんとてひとり物のあはれにすく
ゑめでたきあへりなるにすゝて君は今ひ
此河内りさ庵と紀のちらにたはけ給
一通りはてすまふ又河とぞ紀の年ころ地
し給ふるはとかりかて年一冊に侍と也
めでたるは、つまにしりあさとしもかくそて
河中きこえしよとゆかてあり給ける
しそなる六日のなきて古を通りたくみて
宮このはかしも給て大殿の河内へとおもけ
大臣そてまかり大ての次きし人の方ふして

けさやかにけたかくみたれたる所ましらす
なをこれこそはかの人〳〵のすてかたくとり
出てしまめ人にはたのまれぬへけれとおほ
すものからあまりうるはしき御ありさまの
とけかたくはつかしけに思ひしつまり給へるを
さう〳〵しくて中納言の君中務なとやうの
おしなへたらぬわか人ともにたはふれことなと
のたまひつゝあつさにみたれ給へる御有さま
を見るかひありと思ひきこえたりおとゝも
わたり給ひてうちとけ給へは御木丁へたてゝ

おはしまして御物語きこえ給ふをあつきにと
にかゝみ給へは人〳〵わらふあなかまとてけうそく
によりおはすいとやすらかなる御ふるまひなり
やくらくなるほとに今宵中神内裏よりはふたかり
て侍りけりときこゆさかしれいはいみ給ふ
かたなりけり二条院にもおなしすちにて
いつくにかたかへんいとなやましきにとて大殿
こもれりいとあしき事なりとこれかれきこゆ
紀伊守にてしたしくつかうまつる人の
むつましくつかうまつる人の中川のわたりなる

家のうちにみちあふせ侍るは、まことにすくしき
けしき侍りしところは、よろしからずやありしこさ
てり御なるもしき侍るつみをかんしなけしとの
あまりに志のふかくゆへにてこそへんつかうわさ
たおりぬる人に久しく福へわかりつゝ給ふつ
まことに御かけくひあけたるへはかさゝえてまさき
んいふと申し侍るへしきのやうにおほせ
こゝまへへ申つるぬるき志をきて侍
らはりこのあそひの家のつゝしみ侍らく
あるいはきぬりさいまうちするてせよ給ふ
侍るは、あまりけなかりつるを侍らしと志ふかくあけく
まきつ給ふくらみ人へちりてらんすむしす稀りなる
御きこ女こ成侍らむ、福は、物なりけるきみち守
へきをたちらのきつらやうのうち流れとみ給ふ
なけりとろきまほ申し可ふいとて人々
らせ候ふ侍らしめしくこと見てりこと
つらぬ成ぬと、こそきこえて給へはおもてびきまて
給ふゆかりてあひしつまりきこ給ひしてお
りまうちはことありて書てし人て
きつ侍るは志んてんのしんうありてえ

らしあけさせ給ふくうりそめのこゝろもへらし
御ありさまなどきこえつゝまつりすく
しけりさうしける中将家には宰相の君なく
せんさいなどこゝろありてゝ色こりたる風流し
めでたうこけしもかきこゆる声の春すぎてゝ
うちとけたるこゝろもうちなげかしき様なり
人くるまよりおりたるにこゝをかきわたく
さけの世をあはれになかめおもひとこゆる
きこえ給ふきこえけるをほの君はのかくらうり
御なからのこのみたてまつりおはしく給ひこ

此御そのかんなれはおほしいつるものいかならん
きこえさせてむすめなきむすめおほしゆくし
かくてみつからの給はりこの世におほしすてそ
今はけしからぬひとのきこゆるをおもひそへくれ
しそわかき殿上人もいかでさすかに思ひ
て世のおもひにおとこすゝむことはれ
ひとりゐ給ふまゝにおはしけるまでとなりけり
こむかうておもひつきなれたるとも
二首はしかしこまりてつまやなかく
給ふくみの中をおほせて心あてにおほしけるは言ひし

きこえ給へりこの御ひゞきにやまつと井かゝおほ
かくてめでたきは梅こゝろばへさて給へはわか
御とたちにしてうち侍るにかくてまつ給はそ
御んとしことすゝめになてまつきこえたくく
志のみちまへにきこゆる御前くるしうてなく
まゐりきこえ給ふまでいとはあはれなるを
なりけり給へはまつにしつかにてく
れは井てうしく人のびやうさしと思ひて川
けなりん時なるをおもひたまふかの御心
なけれはきこゆるたまひ川式部の宮のひめ

君か御かくてまつりゆへこゝろざしにこ
しはおほゆらくうちいきこゆるなきこゝろ
しく思ふに御めであはれなる事おもひけりは
聞えしとおぼすかぎりを侍るきこえてうち給ふ
まうで次あるうちけるとしてのち御斗さ
はまうりとぞりと思ふにはおほきにはかなくなん
なれおもふにはかなしききこゆるしおもしき給
御はおはしますしてえうけ給ひすとう
こよなく御ありつゝの御前にかくおもふ
御つゐて思ふとの御まへは人のことをりまり

あはれなるこゝろしおもしろけなくありけるは、紫の
御上はにはかにいらへて見えてうつくしうなりさる
姫君いとけなき御さまにてなりあまたなりける中すこしとけひ
ならてけふなく十二三なりぬるもなりけるにうたまふ
ことさらめきてしらかみなみたりし御かたは、大臣の
かきにて十五のこゝろはへ、いとおかしき色あひの花
御かきなとにも見えてなり孫君の人のまへに
ありくて御しけしきなとにつき御身の御てはけ
あかは、御子ぬなと思ふとも上へる御こゝろにて
かくしたらは人は御中なとすこしすみ

のこと此の孫君や宮なと七條の君の御方みん
侍りしにてけなきに君をは宮にけそりなる
なかう御なかにきこしめしおきて君は人
り給へるそんとりしそめさせ給ふというり
なりみたしとうち見えや御方にさりさそ給
御ありさきの御事にもよはすけの御かたいり
くてとかく給ひし世とは物花御のこそ
しても御もとまり御ことも御目中
あてなくせは御をすくひ上のかたに有
侍るなとさてこそかく侍るのなとけれはかつ

尼君と志らんかな侍くハ、わさくと見きてとこそ
思く侍めるをきこえくしきこえてなにはより
ちしめて寸毒し有侍るをなを上はりとも
海うこふらはつきくしく、海めきてつらんり
おもろしそんや、かくはけハとよしけりく
名し黄なめる御やなと押ゆらし給へつるる
うこにそみかなて尼り物る侍めるとえや
海りおりあへさらしときこ兎とつすみく
みな人へをめこて梅は志りまりぬ
君なとけても禄事給をすいらす梅と

おかなるか、ふつり御目さらめくこれをきてこの法し
はたのあきてこりつ人へけいひをろとうなてやくふ
人へつくれらくとかたんな花やてゆゑをなめく
尼をろおきそてなるちきて給へハはりつる子の
都まて御女給あハ津くりおつしまつくそとと
道てる都の女きうしき来すて、魚はらにそつ
なる海りうとハ禄給めるな侍りしやくらむ
とおりひはろはは物語てけとおりなりとく、梅禄
なりなる都の志とけかきこいとらくてりうしひ
言ひハいすうつきつてかひけひけ、ふそおか

ところありやとことききて つかはしありさ海をと見ん
しそまつりはかけりえそめてくらけまて
みそかり八幡ひかさの海しはのをきてこ
しそまつりて海しう孫梅さけよいかゝかし
本ハ主はる都よ花経ハ色ってめてしよひさけ
かのしあらきつれくあまハすまへつハ由てり稀なり
んあるかくによそ火うけまを手ゐし女君え
ちこ此はうしくちすちかひよのはなう
そ事したる人身中ねのきつるはハ作くありそ
人事と対秀ゑらして地まをうしといふ梅

寺主ハ名その志てよ人の梅てハ令を作り
志て庭りゆかりなり一したしと海ひかひと作を
ハ梅名うつまりぬかけいひ寺主はなけるゑ
とさ見んりひまハあ事語主ハ何をすくより
文はらきりゑりきちゆくと作くしくちま八
無火ハはらくのきこり見人語へかくひ何かな
物をてハとをきま主ハ名をまちうき中とかり
語くけまひ志川にかりへ入語主ハかくゆより
いとはうやうかくすゆり名海よつらうけ
主てこ無かりきくゆくとう庭のまうゑくれとも

つの人をさそひ中ねうしつまとするもの人の上に
さる若しあはれにしらくと乃語ひとこ
しらて思わぬ上に抱てりなそこなるにて
所とならひ上之ありてきたなる侍りてとく
ありしそこさらつ葉に極てらは分の色を
見給ふかんこにり御上て筆とおもひはわか
分乃らく大きて声もせんとて事もらく
情わくをまちかねら夫をあさくはかし
とおもひすゝ給ひて入と所てうり乃給らく
ありろうしおもてきりけりはあれ

そうたなくさめてり人をし見ての声は色ら
あくまひしくあはれに大方半とさる人は何の哀
しく人あん人ありこそ侍めまして侍ついきの
声もありきて海と人多くてきいつと色哀しく
らう各けあ上は、我もしこ見給ふ太う露て
もいかふる人の声乃をさ半すかしおもひは給ふ
色紀の御大方は海りはまいりかんて聞えし
さ年とこうしさて海人大手そことていとちひさやう
中上はうきに侍りさて侍りし此とも志て給ふ
そこともつゝ中ねうしり人きあひあるゝやと

東京大学総合図書館

の給りおやしくらく恨くりけりあなかなや
いうしうにあらんみちらくうらみて思ひ侍りて
はなちすつるよしなりなさけなうこそは
いかが年ごろ思ひ渡りて思ひてきこえてん
ことわりなし女君人のかはいとはかなく
もひきこゆるまでに人のかはきて恋ひ
大将殿のひんなきにかひきさまで恋しさにひきこゆれと
ごらんぜで思ひ渡りてはりつゝ給ひ
はらしからひきりなきてあるきさみてかへり
仰せらるゝの給へは女はこの人の思ひ年さ書

丈なりわりなきにあはれしますてわせまほし
く、いとあさましけなりいとおもしろけれ
君は人の侍りこそにて給ふの事なまう
何事も宮達むかひしけくし給
ひはくも人のかはとかはたいと何させ侍り
よろつにて思ひし寿をそ初めてか御かゝる
も思ひしかはる心の御乃ち侍りて
何かはおりて女君の御母はいと御かたき
もとこはとこそ侍るの御上ともう思し給ひ
女君つまて悔くなさけなくうちにて思ひり

くらさ海しけれハとおもひ見えしかりつる夢
けちこハなきはゝのきこえくまゝにあれ
ひてさや中くおもしなきてはへり
おりなし給つらむしうくてありなむかなしみつゝ
きて給ひもとのしあはうらめしくすきにハ
みなうつりとちひぬ天すさぬにけはかくのさめ
らましなりともけりなりなましハと申つ
りてわやしきますておもひなと申て
よろりての給ひこハとこひ多本けり
さ海のハよくおほせけきてんとも

けれハさよりにいたつきなむとはさてなむ
こてはうくみしかふひあるもてとくてん
とおもつまれくのこそれすなり人そ
のゝ御やきてつりてりはなむいたあかく
らなきはあよ竹の花らくさすうり
おもくもの にあいにやうしくそのはら
あるものいとへと侍るさあもと思うなく
さ海なしハと秋しいろし見ハあまてて見
ゆ海しハくおもしろ海しとおハすぬ
くゆめくくういこそ會はハあさくてをと

御まき袖ゐしも書すゝ今井出て業平
なかりしこそ哀なりけりと、これ註もなし
けり世のつらさにひしとおもひしれ女まう
すしいとつきてしらぬ人みられしく、いとゝくちき
此人おとかれまうぬありしなり此にて
うはにもとへと見ん海しかは海きわっ
うのこすてみなかしほちらせりやにも註し
なりゆかまれは侍とかくうりれつすきつの
はかれ也さ待りあそひれく書すなま今
ともるくしよしもハ花きとなうけそのらく

これらさ海けりハいとてこけりしなまある
歌りりへまゐ註しもおもふ。筆とまてあ
人にお哉あらへいと侍ぎてなかりける歌のか
ゆくはさむきおよなし。ねむしつらて書きて
女ならゆうくつへこそ歌のて侍のて註
思きこくハあをし、御しかり君ハ又の秘の行
かくつのん事も侍とくこつうゝはせてハ
いそくゆうこあらて、かゝうしこのくわり
なきのはおもおかすうりへとも秘いくおもの
中将ハ侍てやとくありけりハ業註

もし又ひきつゞけなつ〳〵とてしも大かたの世の
知らぬ心の内もいかゞとおもひやられてあはれ
なるを中々に杖になつかしうあはれにかなしう
として打ながめつゝ世の中のうきなどきこえ
思ふ事も多く、「御ありさまなど見て
（源氏）つれなう見えて、とう見えてまことにめでたく
うれしうおもひてはべるもかゝる女君なり
さるべき事にてもつきせぬ思ひもなき心地
めでたき御ありさまにもなにとなくおぼえて
つねに心ひとつにしのびつゝ思ひはべれば

侍よりはこの世のみならず、後の世まで思ひなん
思ひきこえ給へるにこそ侍らめ
身（え）もなき心地なればいとゞ心のみ乱れ
まさりてはべり。袖の涙もかゝる事に思ひ乱れ
まさりてはべらず。世を思ひ知らぬことは
人のさまにもなきにしもあらず。世の中を思ひ入れて
心あるべくもあらねど、人の思ひ知らるゝ
なかなか思ひ入れず、心うくおぼゆれば
さて打ながめつゝ、ものおもひにあはれに思ひ
さて大かたの人のうへにも心のうちの

これ中のかくりにてあるは侍りけれとも
しりはのとり見て給へるゆかりさぶらひ
ながらむかしおもへるよしもはべり
月は盈けれどひとりおきゐてものゝ哀
侍りけむほどに中くらうしてあけぼの
あはれなる二つのかきつゝ大人
うつろはゞ思ひてゆかしき人
しはしのゆめはかなしくほどにも
ひとんちやくにあきつるみえ
まて申給ふ折り給ひてもとみえて侍

と給ひし給ひけすまゝあひしはゝ参りて参らせて
申されば今さらながら門とゝのへ給ひとこそ
なりけるをまかりて給はせよろしからん年はなほなほと
あはれなることのほかにはかなきことをあはれにて
をれなかく見えあつめて今侍りけるに
けふはおもはしありせはこの御はいかにすみ
まゐらせいてまいりはとおきくらゐのものに
いとおもひかりて御ことおもひし
こゝろにてきこのことめしそれよりは何とかありし
中納言の子は悪きまゝせてんやらうなけれ

思ひしを心ちよくはらよ人ありせんかし色よ
もまゐらせてまつりしとの給へはとうこ
兵部卿せさせ給しみ孫なり人の
給ひけんをやと申も、御孫つゝまてゝおほせ
その御孫君は、御能むしのおとゝの御やなら
内も侍り寿出三年はかりそひくてもめ
まゐりて世のおきてそてり女御になりと思
かけさせて給ひしのなるまゝにまかせて給
ふのゝやめし給ひしくすこて人そう
内にもよくの給へは宣下て侍は

りて御心はへくう心はへしくれ侍りしは、よも女御なむ
おくれ給ふ侍りしすと中宮さて五六年はかり
て皇子かうへまゐりたまふやうならんとしに
御けまてと宿めきつゝさ宿とくあはて人をさ
えかりめし侍まてはいとあはれなることゝ給
われは元よりとめてくらうまてと思ひなりと
ときこえの年もいとゝ御内の宰年は
いつて東宮ておはしてもつりけれつ
まり御事は、かくは母后内まてはいとよく
は御世給ひのこの年そめてはかなきの思

うへはかへる道にておさめ給てけり物くるしとたえたえに
やうやうなりてきこえけれは女はいとゝ涙をなかし
きこえけれともかひなくてやみにけりの子孫なりける人なん
そもたゆくてさらすゝろにものおもひけるに
ひろけなりけりとおもはくて
男の菊をとりて菊ありけるをしと歌よみける
めあはせてそのはしに名をかきてそのかけをし
ちかきあたりにありける人の菊をさしおきてきこえ
てもかはしく植てをちに思ひ名をしりて思
はけくて物かゝりて又の日にこえけれは
さりとてゆゑありてはゝいみしくなきけるに
おもしきこえてまかりて折はたれとてあはす
御てもろこしの綾をかりし物をとりて後はやさしき
はゝの色ありしく給ふ御給をしらせて
いはとおもひつききこえて給ひおもひてありけり
けるか年はこえてそのきはゝ心ありし給ひそ
ともかくまてくめすまりは後そておきてさ
いらぬきみことも給ひけりこれはまへつかたのかり
きゝとかめてし書物に思ふてはかなかりし
ありけれは筆をとりてかきつけてたまはりく

君めしよせられてありし書したゝめおはします
中きゝ給ひけりと思ひし給ふは不才のなく
かゝり候つるとの給ひけり志かくと申に八御
ひめのことくあさゆしとそ又給つりあこ
ま志しなう此候よりおききゝ給ひけり御きに
思し今御ほまて母のりけみくふひちそ
しとそ梅つ給ひぬ志ろこ雨ふけくらの
おつり給なり御りうしあこはわか手ま
とけまてよ此御母のなし人ハ給さ紀君つ
りりおもひとの給へハ御やあり候らん候ひけり

名残ことゝみやこ忘御のだいしとおぼすまに女
とまりけり給て内よりかそはりけり
し給ぬ今げ給ひりの給く御そくまて
せさせ給ひてにおくめ給へありつひ給のこ
もつ給ひありかまてこの子のおもひさぬ
心よりはそひりとせはあくしき君さへ
うりそ御ん君のおもしと候とりきおかの
御して思ハめそてらに紀年し我かうそうとて
からとけりの候つゝきてにはのかり
しのうちのひあり給ハけりまも御てしやと

東京大学総合図書館

兄弟共にこそありけれは何の孫とおほしきさゝ海
をも見まゐりてこそ何ゆゑ(?)ありけりは舟(?)は今きこえて思
ひ奉り成りけり扇は十六さほしありてある時の海
をはしめとしてうちしてあり伊川(?)
にありし常に兄弟とおもひとおもはしけり
常にうちしたる故はしかるの給ふしたまひ
海を通一立ありにしてもしてかく人めを常にありしほか
てり是今兄弟常の海のをのとなれん人の
姫君(?)いとおもしくをしまりへてる様は海へいの
扨は日数を経るうちに兄弟のこの使

まつは給ふにたちより海にて給ま祢して有り
あはしりおかて海しそありきへのこれまして
きそ尾りあはせはしてうしこまりしより
こ様に扇てりは扇りくかしまし
の給ひ結(?)り之の常吾まゐりてあし給
けまはいしくてまつあしてそそりあり
ありけりうそこありけつつあらしだてたり
はしめはゆさしとたへかしなりて祢に
給りとてましけ人常兄弟ありさ海ほ
見てそまゐりてもゆの兄弟を産(?)

東京大学総合図書館

まてまかりしかけきつはえやくいゑんとさるゝ
まこく門さそてまいらつ弟きこうけさんへとの
御なりけれハ二君の御ていかうて槌りてけ
ちかけれハさいつ侍るしなや御しけれは
しめくさらも見つらせ給ひてせんよ槌を飛
まいてとてまさ度よ中ねと思めしかか
稚しそわらく禮りけ川ろひあさるるし
て人こそ志川のそ御さうこあまてい小君
えたら掾あいさすよろ川の下ととめたりさて
めさ夜りけるへくるらしてあまり恭

あいそとのさ由しく清うしりてさめて侍りり
ひ出しかしおかさしとなきての斗侍へいくけ
しうのかたさんけの花のまさのなきこ人のそら
半出ひつそらハ侍らうらいしまう花ととい
おもしてつらるやまけれハ人くさけに
今夜ハ本生
松さへけせくあむしと恭て内をよ下風しと
ふまいくと思のんと出ひさねらそ公の中よ
いとうし如内てきよあろけの本ゆ急
あさてすき母しおへの内前こひと蒲まる
高僧内よみらう波さうやいまいらつ前

東京大学総合図書館

まつはれしよりもあはれに御心志深くて思ひ、
出でられ給ひける人なりし侍りけるほどに
らぬ御さまはおぼつかなくて心苦しくも御様
侍りしさまうちあはれ見るをとてもよく
てもなしは侍らで御本意なく世成りけるに世を
しんにて心はしきなくてもあはれとおもひて
ひとへてより君は侍りけりたえける御事と
御さまおもはせて御心しづめてはつか事
給へ侍りけるかりけるをきこし召しは
あさ御かたのなかりける心の程を

比もいとけなくしてこそ成りまさりてはと侍りこ
御しるをしきりにけり物もなく給
年侍らくすめきてしかしこまりてより
けれ本の心地きこえてうれしき御ありけり
あさ御と思ひあかりしきこえんこそかなしく
けれはの給へり女の御そより御と御事
返しけるわ
朝の御局世の中の君は心さしたれ
かくありしきこゆるをきこえてもうけとるこ
きつまりとおしなるましく御ありて御

ひかりくはれ人の御尾しとみるらんとてもひ給はゝ
此人ハ侍さふらふなり一両年給はすさふ
りとおもしつけられまて人のめのさき給はん
おほきてハらんハけりなる也禄くたう
はまはつくこそんてと給まてくわいさう
おうめざ給ひくはけまハはゞまてとおもせと
はし更おもしとまりまてを給まて給ん
万り松かく々事とら給てとふもよろし
けまはこめたく人のまうく給ひめまいらし
おけめて其の為ハこそかくも見えたりしけるに

ころりおすてそとら給ひにくはらせもらふ
あま世給てりやうくあるてし若はありさ給ひ
う拝しきめて毎しと見ひてまいつま申さき
人りハ中くに給ひりおもはゝはるとそ

えにしきや　たつた山の　やま
おもしろき　あそびにも
こゝろにわすれて　こそ
多船のこゝろから　秋の山日

B 7874

東京大学総合図書館

えしまやたか山のやま
おもころもまなごも
こなりしあくれてから
為細のこいそか秋の日

挿入資料　東京大学総合図書館

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館